

2025年度 UPLB 英語コース受講者の声 (Batch19*)

*2013年開始、履修者累計約350名と神戸大最大級の英語研修・文化交流プログラム。2025年度も2.21(土)〜3.14(土)の春休み3週間、農歴1.2年生混成のB19(12名)とB20(18名)の30名(理学部5名)がフィリピンUPLBで履修、2単位を取得しました。3人部屋での生活、全員での毎食、2教室での授業、所属、学年ばらばらな様々なグループで濃密な課外活動。平日午前午後各3時間の授業で表現力や発音のスキルアップ、授業後にUPLB 学生と交流する最高の2時間、夕食後はUPLB 上級生による宿題サポートや発音補習、他にカラオケ大会、UPLB 内の植物園、国際イネ研究所(IRRI)、生物科学研究所やマニラの大型堂、要塞跡やダンジョン、自然史博物館などの見学。隣県エスクデー口村でフレッシュ。皆既月食(Blood Moon)も見られました。そして互いに得がたい友となり、一生忘れない経験と思い出を携え帰国、事後学習会で思い出や成果を熱く語り、体験談を綴り、新たな思いを胸に新学期に今年も10月始めに説明会、WEB申請(パスポート取得済が必須)で受講者決定、11月上旬に第1回事前学習会、航空券手配し、出国前にさらに3回事前学習会をして、一緒に仲間とフィリピンのことや様々な備えを学修予定です。問合せは、農学部応用生命科学コース 金丸(kng@kobe-u.ac.jp)が農学部教務学生係(ans-kyomu@office.kobe-u.ac.jp)まで。

新しい自分

農学部食料環境経済学コース 2年 Y.K(YONE)

日本を離れてフィリピンで3週間です。なかなか無い体験であり、まさに「非日常」です。非日常だからこそ、普段の大学での自分、家での自分、つまり日本での自分を忘れて、客観視して新しい自分に挑戦することができます。僕は周りに自分を押されて押されて今回の留学に参加したが、参加して本当に良かったと思っています。もちろん一番の目的は英語コミュニケーション能力の向上ですが、他に手得られたものが各々ありました。

僕が得たものは「積極的なコミュニケーション」です。僕はコミュニケーションを取るのがそこまで得意なほうではなく、特に集団内でうまくやっていたのか、と今回の留学でも少し不安を感じていましたが、実際にフィリピンに着くと、現地の方々の明るく優しい雰囲気や、壁を感じさせないコミュニケーションを目の当たりにしました。現地の方々が等しく積極的に発言しており、誰かが仕切るといふ雰囲気ではなく全員で盛り上がりつつありました。そのときに「自分も積極的に発言したり盛り上がりたかったらいいな」という風に思え、そこから3週間は自信があることを理由にコミュニケーションに対して消極的な態度をとるのをやめ、周りと積極的にコミュニケーションを取れるようになりました。このプログラムに参加することが決まったときから現地の方々と仲良くしたいとは思っていたのですが、なかなか踏み込めずにいた自分の背中を現地のメンバーが間接的に押してくれました。

向こうでの授業は2クラス制で、僕のクラスの授業は日本での授業に比べてアクティブで、座学というより「参加型の授業」という感覚でした。生徒全員に等しく発言の機会が与えられており、いい意味で退屈しない授業でした。参加型の授業と聞くと少し緊張してしまうかもしれませんが、何もそんなに難しいことを聞かれるわけでもなく、質問やクイズに答えながら楽しく授業を進めていくという流れでした。先生によって授業形態は少しずつ違い、授業中に外に出て活動する授業を設ける先生もいれば、毎授業の最初にチームに分かれてゲームをしていく先生もいました。授業内容は英語コミュニケーション能力の向上をはかるためのプログラムが組まれており、英語の発音方法を基礎から学んだり、場面ごとの英語表現について学ぶなど、コミュニケーションを取るうえで大切なことを多く学べたと感じています。

また、授業中には英文をペアで読み上げる時間やプレゼンをする時間、グループワークをする時間など、習ったことをその場でアウトプットできるタイミングが細かく設けられているため、学んだことがしっかりと活用し実践することができました。プレゼンやグループワークといっても「発表」というガチガチのものではなく、明るく楽しい雰囲気の中で自分と関わるもので、みんな軽く緊張しつつも笑顔で発表していました。僕が特に楽しかったのは、自分が好きなものをみんなに紹介するという課題で、手のマッサージ方法や絵の描き方、折り紙の折り方など、様々な発表がありました。僕は仲良くなった現地学生に協力してもらい、その人の写真を使いながら発表をおこないました。

毎日の授業の終了時刻は日本の高校と同じで4時頃です。授業が終わるとそこからは晩御飯の時間まで現地の学生とのフィリピン散策タイムがあり、班ごとに割り当てられた現地の学生が僕らを街の様々なところへと案内してくれました。はじめは英語だけで喋らなければならないので緊張しますが、向こうも僕らに配慮してかなりゆっくり喋ってくれて、こちらが頑張って話そうとしているときは急がずと優しく待っていてくれました。この散策タイム(このプログラムでは「G」呼ばれていました)は各班が「日本人学生4人+フィリピン学生2人」の少人数で構成されているため、全員がしっかりと現地学生と話すチャンスが設けられています。また、Gが授業後すぐにあるため、授業で習った内容を実際に現地学生との日常会話のなかでアウトプットすることができます。このようにGは今回の留学において特に濃い時間であり、僕たちで英語コミュニケーション力がかなりあがりたと感じています。また、ほぼ毎日2時間を超えて、普通に友達になれます。ゲームパーティーやカラオケ大会などで全力で盛り上がり、最終週はみんなでピクニックをするなど、本当に多くの時間を楽しく過ごしました。僕の現地の学生は体調不良によりお別れの挨拶は対面では出来ませんが、ビデオ通話を彼の家とつなごうと頑張りました。

また、授業がない日にはツアーが幾つか用意されていました。1週目の週末は土日共にフリーデーだったため、お出かけする人もいれば寮でゆっくりする人もいました。寮から何分歩いたところにあるプールもあったため多くの学生がこの週末に泳ぎにいっていましたが、僕は友達と弾きギターに合わせて歌ったのんびりのんびり休日を楽しみました。この留学の3週間では朝ごはん、授業、昼ご飯、晩御飯、と1日のほとんどの時間をメンバー30人と同じ屋根の下で過ごして、みんなとの距離が縮まるのが早く、一週間が経つころにはかなり仲良くなっていた記憶があります。2週目以降はフィリピン大学の研究室を見学できるツアーがあったり、周辺の市場やマーケットに連れて行ってもらい買い物をするマーケットツアー、首都マニラを観光できるマニラツアー、マニラ近郊のラグナ州のエスカデロツアーなど数多くのツアーがありました。マーケットツアーでは大きなショッピングモールでお買い物をするので、僕はここで土産を大量に購入しました。お菓子や飲み物のラインナップも豊富で、インスタント食品なども並んでいました。レジの外には飲食スペースもあり、コンビニを使った飲み物やフィリピンの料理など、魅力的なお店が揃っていました。2週目以降は授業も詰まってきたり、小休止のお買い物として最適です。また、マニラツアーでは観光やお土産ショップ、マニラ自然博物館など、様々な施設を見学するツアーが組まれており、楽しみながらフィリピンの歴史を知ったり、博物館の展示を味わうことができます。個人的には自然博物館が特におもしろく、さまざまな動物・鳥類・爬虫類などの展示に加え、食虫植物やフィリピンの有名な花「ラフレシア」の実際のサイズでの展示もされており、ワクワクが止まらない博物館でした。あの博物館は特に行って良かったと感じています。また、エスカデロツアーも魅力がいっぱいでした。数多様な展示品が並ぶ展示施設に加え、滝を望みながら川のうえで食事ができるレストランとがあり、バナナの大きな葉っぱを皿にしてランチを楽しみました。ランチのあとは伝統舞踊をみたり、竹製のパンボートに乗ってカヌーをしたりと、各々充実した時間を過ごしました。僕は疲れ切った体力がなかったのでみんながパンボートを楽しんでいる間にインドア派の友達と一緒にのんびりお土産をみたりしていました。ここまで読んでいただければ分かる通り、ぼくはかなりインドア派で体力もありませんが、休憩したいときは休憩できるという場面もところどころ設けられていました。基本的にのんびりとした過ごし方でもできるツアーばかりなので、こんな僕でもしっかりと楽しむことができました。

現地で3週間も本当に素敵でしたが、日本に帰ってからも現地の学生との連絡は続いており、ビデオ通話をしたり、DMでやり取りを続けているメンバーもいるようです。メンバーとの交友関係もずっと続いており、現に僕はいま留学メンバーとLINEをしながらこの体験記を書いています(片手間でごめんさい)。留学に参加するという意思を持った30人の友達ができたという点が、この留学の一番の宝と言っても過言ではないと思います。過去にこの留学に行った先輩方もメンバーを集めて食事に行ったりと、しっかりとコネクションが残っているようです。僕も何人かとこの縁の約束をすでにしており、彼らにまた会えるのが本当に楽しみです。

結局のところ、どのような心持ち・マインドでこの留学に参加するかだと思います。僕は積極的なコミュニケーションが苦手だということを理由にして、大学一年生のときにこのプログラムの参加をあきらめました。しかし、そんなのは気持ちの持ちようだと感じ、二年生の今年に改めてプログラムへの参加を決意しました。大事なことはコミュニケーションへの積極的な姿勢を保ち続けることです。フィリピンへのコミュニケーション力を伸ばしたいなら、下手くぱいでも不用意でもいいからコミュニケーションを取りに行く。3週間もあるのだから壁を乗り越えるチャンスはたくさんあります。現地の方々は発言のチャンスも度なく設けてくれます。コミュニケーションが得意な人にとっては性に合ったプログラムですし、コミュニケーションが苦手な人にとっても日常から離れて自分の殻を破る絶好の機会です。フィリピンの方々の温かい雰囲気にも包まれながら英語コミュニケーション力を伸ばせたあの3週間と、それを共にした30人のメンバー、そしてその中で生まれた新たな自分は僕にとってかけがえのないものであり、今後そうであり続けたい、そう感じています。

たくさんの素敵な人と共に過ごした3週間

農学部応用環境経済学コース 1年 KA(KURECHAN)

私は、高3のときに行ったオープンキャンパスで、初めてこの留学プログラムのことを知りました。そこで、先輩がどうも楽しかったと話していたことが印象的で、内容も魅力的だと思い、自分も大学生になったら参加しよう決めました。UPLBに行こうと決めてからは、普段は英語の練習をしたり、単語を調べたり、雑談したりしつつ進めました。さらに、カラオケ大会の前日は、一緒にダンスも考えてくれたりしました。でも、プレゼンの準備になると、真剣にアドバイスをくれたりして、ほんとうにためになりました。

この留学で1番よかったことは、たくさんの方と交流できたことです。一緒に渡航した30人の仲間と神戸大学の教授、そして、放課後などに街に一緒に散策した Student facilitators と、夜、勉強の手助けやおしゃべりをしてくれた Student Guardians、UPLB の教授と、このプログラムのスタッフの皆さん、そして、一期一会の出会い。

普通の大学生活を送っている中では、特定の人以上とはあまり深く関わることがありませんでした。だから、留学前から知っていた人でも、これまで知らなかった素敵な一面を発見することができて嬉しかったです。

そして、Student facilitators の場を盛り上げる能力の高さと、自分たちも盛り上がりつつ楽しむ姿勢はほんとうにすごい見習いたいと思いました。Gという、平日の放課後に2時間ほど Student facilitator と大学周辺を散策する時間は授業を頑張るモチベーションとなり、また、自分たちだけでは入れないようなお店にも連れていってもらえて本当に楽しかったです。私の facilitator は休日も一緒に街を散策してくれて、特に教会の日曜礼拝に連れて行ってもらえたことは印象的でした。讃美歌の伴奏が電子ピアノ、ベース、ドラムでびっくりしました。また、日曜礼拝は2部制で、1部がタガログ語、2部が英語だったことも、日本では見ない光景で、多言語国家らしいなと思いました。また、マーケットツアーに行ったりときは、バナナの品種の違いについて説明してくれたら、鶏の足のこと、形がロビンに似ているからアディダスと呼ぶことを教えてくれたりして、とても有意義な時間になりました。

また、事前学習会のときはお恥ずかしながら、夜2時間の任意参加の勉強会、ナイトセッションは少しもどかそうだなと思っていました。しかし、実際にはじまるまで全くそんなことはありませんでした。Student Guardians はみんな優しく面白くて面白くて、普段は英語の練習をしたり、単語を調べたり、雑談したりしつつ進めました。さらに、カラオケ大会の前日は、一緒にダンスも考えてくれたりしました。でも、プレゼンの準備になると、真剣にアドバイスをくれたりして、ほんとうにためになりました。

22日間のプログラムの中で、授業がある日は10日間でした。そして、この留学で1番印象に残っているのは、初回の授業です。この授業では、教室の外へ出て、15分の間に見知らぬ UPLB 生に声をかけて自己紹介したり質問したりして、一緒に自撮りを撮るというワークがありました。私は緊張してなかなか話しかけられませんでした。先生の手伝いもあって、ベンチに座っていた3人の学生さんたちに話しかけました。すると、とてもフレンドリーにお話してくれて、私の拙い英語も一応懸命に聞き取ろうとしてくれて、日本のこともいろいろ質問してくれました。そして、自撮りを撮ったタイミングでインスタグラムも交換しました。彼女たちとの会話はとても楽しかった反面、「What is your favorite food?」のような、シンプルな文を、1回では聞き取ってもらえなかったことには、少しショックを受けて、もっとスムーズに会話するために、発音やイントネーションも意識しようと思えるきっかけとなりました。他の日も一度だけ、同じ場所でのうちの1人と偶然出会い、少しかだけお喋りしました。そして、帰国前日に、その子から DM が届きました。「突然、明日帰国することを思い出したの。(中略)あなたのよう優しい新しい友達に出会いたいから、来年は友達と一緒にファンリテーターに応募しようと思う。」といった内容で、とても嬉しかったです。

帰国してからも、この留学でできたフィリピンの友達と、英語で DM したりしています。留学に行くまでは、現地の人とこんなにも仲良くなるなんて思っていなかったの、とても嬉しかったです。

また、今回の留学で英語力の伸びを実感したタイミングは2つあって、1つ目はプレゼンのとき、2つ目は英語で手紙を書いたときでした。プレゼンは、5〜7分で、得意なことをデモンストラーションするといふものでした。これまでは、英語が苦手だった私は、英語のプレゼンは毎回原稿を丸暗記して臨んでいました。しかし、今回は、丸暗記するにはあまりにも原稿の分量が多すぎるし、準備時間も短すぎるということで、重要そうな部分や、とっさに表現しようところだけを暗記して臨みました。プレゼン中に頭が真っ白になって詰まらないうかがかなり不安でしたが、意外と楽しくそつこくこなすことができて、いい成功体験を積めたと思います。また、帰国の2日ほど前に、お世話になった方々に、英語で手紙を書きました。書き始めるまでは、言いたいことがなかなか表現できなくて、たくさん悩んで調べながら書くことになったと思うのですが、思ったよりもスムーズに書けました。そして、伝えたいことをスラスラと英語で表現できたことに自分でも驚きました。

この留学では、授業だけでなく、いくつかの Trip もあります。そこで印象的だったのは、マニラの Fort Santiago で学んだ、第二次世界大戦のことでした。当時、日本軍はフィリピンを占領していましたが、私の想像以上に残虐な行為をしていました。また、マニラの建物のおいたところにも日本軍が潜っていたため、アメリカ兵がマニラのほぼ全ての建物を攻撃して破壊し、マニラは壊滅的な状態になったそうです。そのことを知ったとき、フィリピン人は他の日本軍から占領された地域のように反日感情を持っていてもおかしくないはずで、でもそれを全く感じなかったのはなぜなのか、と疑問に思いました。そして、私たちが日本人だと知ると、日本語で挨拶をしてはくれて、とてもあたたかく受け入れてくれたフィリピンの人たちの優しさにこれまで以上に目が行くようになり、改めて感謝の気持ちが湧き起こりました。

この3週間は本当にあっという間で、帰国するのがとても残念でした。フィリピンに来たときは食べる量は減らず、むしろ増えていたのに、帰国してからは少し量が減って、それほどフィリピンの生活になじんでいたのかなと思いました。2回生以上が、教養科目の英語の授業がなくなるので、意識しなければ、英語に触れる機会も減ってしまうと思います。でも、春休みにフィリピンに留学したことで、英語学習のモチベーションも高まったので、このモチベーションを途絶えさせないように、これから頑張っていきたいと思っています。



マーケットツアーのジニーにて。日本では食べられない品種のバナナ GET!



UPLB TRIP で訪れた Makiling Botanical Garden にて。

とりえずチャレンジすればいい

農学部応用植物学コース 1年 Y.M(JASMIN)

皆さんは留学に興味がありますか？私がこのフィリピンへの留学に参加を決めた動機は、極めて実務的なものでした。それは「英語を鍛えたい」という一点に尽きます。日本にいれば文法や読解の学習はいくらでもできますが、音としての英語、特に英語話者との直接的なやり取りを通じて得られる発音の矯正やリズムの習得は、現地で過ごすのが最も効率的だと考えたからです。

だから、正直に言えば、出発前の私はフィリピンという国自体にはそれほど強い関心を持っていませんでした。むしろ、日本とは大きく異なるであろう食事や衛生面、未知の生活環境のことを考えると、出発が近づくと不安ばかりが募り、今からでも行くのをやめられないかとさえ考えていました。「英語は学びたいが、生活は大丈夫だろうか」という期待と不安が入り混じった、複雑な心境で飛行機に飛び乗ったのを今もはっきり覚えています。

しかし、実際にフィリピンの土を踏むと、私の予想は良い意味で裏切られました。まず、研修中に会う人々が皆とても優しく、フレンドリーでした。そして何より、ご飯が美味しいのです。この二つが分かるだけで、私の不安はすっかり消え去りました。

毎日の授業も充実しており、非常に面白い時間でした。講義では、単なる英語のスキルだけでなく、コミュニケーションの本質を学びました。例えば、相手を尊重するための丁寧な表現や、自分の考えを的確に伝える方法など、とにかく実践的な英語を学ぶことができました。

授業では学んだ表現を実際に使う練習も行います。ロールプレイをしたり、みんなの前でプレゼンをしたりと、アウトプットの機会が豊富です。最初は誰もが不安そうな表情を浮かべていますが、次第に慣れていき、最終的には皆が堂々と英語を話せるようになっていました。英語は単に用件を伝える手段ではなく、相手との距離を測り、敬意を示すための重要な道具であることを学ぶことができました。

また、先生が授業に連れてきてくれたぬいぐるみの「Sunshine」は、私たちの緊張を和らげ、教室全体を温かい空気で包み込んでくれました。こうした講師の方々の細やかな気配りがあったからこそ、私たちはリラックスして、学びに集中できたのだと思います。

滞在中のある週末、街角での出来事も忘れられません。友人たちと訪れたファストフード店で、注文機の使い方が分からずに立ち往生していた時のことです。焦る私たちに助け舟を出してくれたのは、後ろに並んでいた現地の方でした。その方は嫌な顔一つせず操作を教えてくださいただけでなく、私の持ち物から私が大の「ポケモン」好きだと知ると、その方もポケモンが大好きだということまで話がぐいぐいと盛り上がりました。

フィリピンと日本。言語も文化も異なる二人が、一つの共通のコンテンツを通じて、まるで友人のように笑い合えたのです。英語が「勉強の対象」から、誰かと心をつなぐ「生きた言葉」に変わった瞬間でした。

しかし、その感動の直後、私はフィリピンのもう一つの現実と直面することになります。店を出たところで、子供からよく分からないおもちゃを高値で売りつけられそうになったのです。日本ではまず見かけない治安の厳しさや生活の格差を目の当たりにし、大きな衝撃を受けました。驚ほどの優しさがある一方で、日本では見かけない貧富の差を体感する場所でもある。この多面性を知ることで、フィリピンという国をより深く理解できた気がします。

日本にいると日常生活で本気で困ることは滅多にありません。もし困ったとしても、家族や友人に頼れば解決することがほとんどです。しかし、見知らぬ異国の地ではそうはいきません。言葉も通じず、身近な頼り手もない孤独な環境だからこそ、偶然居合わせた他人のさりげない助けが、温かく、心に深く刻まれるのです。「困っている人を助ける」という当たり前の行為が、これほどまでに人の心を動かす力を持っていることに気がつきました。

順調に見えた研修生活でしたが、途中で体調を崩してしまうというアクシデントにも見舞われました。高熱が出て身体が思うように動かず、不安で押しつぶされそうになった時、私を救ってくれたのは周囲の温かさでした。現地のドクターは迅速に診察して適切な処置をしてくださり、何より一緒に留学に行った仲間たちが励ましてくれました。この経験を通じて、「不測の事態でも、周囲を信じて頼れば道は開ける」という揺るぎない自信を得ることができました。フィリピンの人々だけでなく、日本人の新しい仲間ができることも、この留学の大きな魅力だと私は考えています。大学生活では一度固定された人間関係から抜け出す機会は少ないですが、この研修で普段は関わらないタイプの人たちと話し、協力し、遊ぶ中で、多様な考え方に触れる面白さを知りました。帰国した今、一緒に留学した仲間たちと遊びに行く予定を立てているほど、かけがえのない友人ができました。

帰国した今、私の心にあるのは「フィリピンが大好きだ」という確信です。英語の発音を鍛えるという当初の目的を超えて、私はこの国で、目に見えない大切なものをたくさん受け取りました。もし今、これを読んでいる皆さんが、不安や恐れで一步を踏み出せずにいるなら、私は自信を持ってこう言いたいと思います。「大丈夫、とりえずチャレンジしてみてください」と。確かに日本とは違う環境ですし、大変なこともあるかもしれませんが、そこには必ずあなたを助けてくれる誰かがいます。そして、その経験は、今のあなたが想像もできないほど、あなたの人生を豊かにしてくれるはずです。私はまた必ず、あの温かい人々が住むフィリピンを訪れたいと考えています。



現地で誕生日を迎えた同室メンバーをお祝い

2025年度 UPLB 英語コース受講者の声 (Batch20*)

輝く瞳に魅せられて—UPLB 研修体験記—

農学部応用植物学コース 2年 U.(KOUSU)

笑っていても友人と目が合わない、買い物をして、アルバイトをして、食事をして、満たされている感覚がない。何をしてもより強い刺激を求めるばかりで幸福を感じる「器」の底が抜けてしまったかのようだった。そんな虚ろな日々が180° 転回したのは UPLB (フィリピン大学ロス・バニョス校) で過ごした3週間だった。

現地で出会った友人や見ず知らずの人々が見せた瞳の輝き、笑顔、そして言葉。それらが、いつしか忘れていた思いやりと感謝を思い出させてくれた。ここでは私がフィリピンで感じたことを率直に綴りたい。この体験記が参加を検討している後輩たちにとって一つの指針となれば幸いである。他の体験記とは少し趣が異なるかもしれないが、対人関係や自己の内面について深く考えたこと、そしてもちろんフィリピンの風土や英語学習についても触れていく。

1. 到着

開空から飛び立って飛行機の中で3時間を過ごした。移動している感覚はさほどなく、ただゆるる筒の中において窓の外の風景だけで空にいてる感じだった。降り立った先のマニラ空港は滑走路のすぐそばに色とりどりのトタン屋根の住宅が密集しており、日差しと気温も知らない場所のそれだった。空港から大学のあるロス・バニョスへと向かうパンからはスラムと高層ビルが光と影のように共存する都市のありようが見えた。交通ルールなどは存在せず、それぞれがまるで会話するように有機的に車線を変更しながら進んでいた。なぜそれで事故が起きないのか滞在中ずっと不思議に思っていた。

ロス・バニョスはフィリピン最大の湖であるバイ湖の南端にあり、マニラからおよそ60kmの距離である。亜熱帯の山中に突然キャンパスが現れるような感覚で、想像以上にローカルな場所にわくわくした。

UPLB は広大な敷地の中に農、文、芸術などの学び舎が点在している。私たちが学んだのは GAS-LITE 棟で、正門からまっすぐ進んだ先にあるオペレーション像の背後に建っている。オペレーション像とは両手を天に掲げるたくましい男性の彫像で、国家への奉仕と UP の理念である HONOREXCELLENCE, SERVICE を体現している。初めてのフィリピン料理には肉が当たり前のように使われていた。不思議な食感と風味だったがおいしかった。不安と興奮がせめぎ合う心境で、なかなか寝付けなかった初日の夜。

2. 英語学習

これまでは座学でしか英語を学んでこなかったが、UP では実践的かつ表現力を求められる授業がとて多かった。最初のうちはおそれるおそれる間違えないように様子を見ながら授業を受けていたが、それでは来た意味がないと思った。授業中や課外活動中に徹底して英語のみを話すこと、講師の間に真っ先に返答すること、グループワークでだれよりもアイデアを出すことを意識した。最初は数人の間で始まった行動だったが徐々に教室や集団全体に波及していったと感じる。まず自分が勇気を持って行動することが結果的に周囲の環境をよくすることになった。これは大きな学びだった。特に印象に残っているのは模擬面接をしたことだ。お互いのことを知るために言葉を学ぶというごくシンプルで大切な過程を再体験していると思った。

3. 三人部屋での共同生活

このプログラムでは約30名が3週間にわたり寝食をともにする。楽しい思い出はもちろん、ふだんは人に見せないような弱みまでさらけ出し、夜遅くまでトッピングを囁きながら語り合った。翌朝はカリガリに起きて登校する。そんな毎日の中で単なる友情を超えた「信頼と絆」が育まれた。研修前の私にとっては「本音を伝えないこと」が処世術だった。しかしそれは、いつしか友人関係を表層だけのものにし、心から信頼できる人を減らしていたのかもしれない。フィリピンでは、一人になれる時間は少なく、常に誰かの目に触れる環境だった。それゆえに悩んだり傷ついたりすることもあったが、その度に仲間と支え合い、受け止め合うことで乗り越えてきた。異国での集団生活という特殊な環境で人とまっすぐ向き合った経験は自分にとって圧倒的な財産になった。

4. UP 学生との交流

正直なところ現地の学生とは形式的な交流に留まるだろうと思こんでいた。しかし実際は違った。最終日の夜、オペレーション像の前では英語、タガログ語、日本語の3つが飛び交っていた。私たちが教えた日本語と彼らが教えてくれたタガログ語。「いい夢見ろよ」「風邪ひくなよ」、「Salamat -po (ありがとう)」、「Take care!」、「Good luck!」、「Mahalata Kita (大好き)」。どの言葉もおなじくらい温かく感じられた。放課後には街を案内してもらい、カフェやファストフード(ビザ、Jollibee、Halo-Halo)へ行き、ビリヤードやブリックラを楽しんだ。そんな時間の中で日本のサブカルチャーの話から、将来の夢、フィリピンの政治情勢に至るまで深く語り合った。友人の Yael が「野良猫に餌をあげすぎると野生で生きる力を奪うからいけない」と語った時の優しい表情。そして Geo が課題を後回しにしてまで遊んでくれた時に、「課題をしたことと10年後には覚えていないけど、みんなと過ごすこの時間は10年後にも覚えていられるからこっちを選んだんだ。」と言ってくれたこと。彼らの言葉や表情の一つ一つが鮮明に思い出される。

5. 温かい人たち

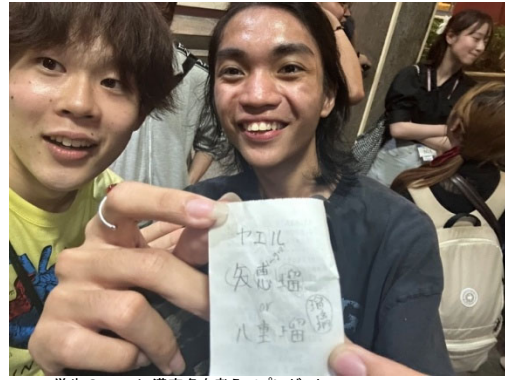
ロス・バニョスやマニラの街中であつた人たちの笑顔と眼差しが忘れられない。ホテルで毎日食事をつくってくれたエミリー、トライシクルの運転手、Bar の店員、露店で食べ物を売っていた死別した夫が日本人だという女性、一緒に「乾杯」した筋骨隆々の人たち、大学の公園であつたたくさんの少年たち(フェルナンド、ラッセル) 体育館で出会ったバレーボール選手たち(アイリス、ケンジ、ジャスパー、サイラス、ディーン)、韓国料理屋の店員、そのほかにも本当にたくさんの人が笑顔くれた。その誰かがまっすぐに目をみて、素敵に笑ってくれた。なんの打算もなく、純粋に人とその時々を楽しむすばらしさを教わった。これらは街並みや匂い、音と一緒に鮮烈すぎる思い出として残り続けている。今でもロス・バニョスの埃っぽくて、人、車、バイクが行きかう、混沌としているが活気のある街の情景が脳裏に浮かぶ。

6. 小旅行の思い出

街並みはスペイン、アメリカの外来の文化とフィリピン固有の伝統が混ざり合って形成されており、そこに現代的な日本や中国のカルチャーが流れ込んでいる、万華鏡のような空間だった。マニラや Villa Escudero ではスペイン統治時代の面影を強く感じた。コロナ様式の住宅や教会、大聖堂などの石造りの建築に加えて、道路の区画整理もどこか西洋的で整然とした。一方でその整理された区画の中には所狭しと人々の営みが溢れかえっていた。フィリピンの急な奔放さや西洋的な均整のとれた美しさの両方を併せ持ったマニラの在り方には強く惹かれた。

7. これから履修を考える人へ

私が伝えたかったことは、「日本での暮らしが不幸である」とか「海外にいけば全てが好転する」ということではない。そうではなく、この研修が「異なるものの見方を手に入れ、それを日本で日々の生活に組み込むきっかけになる」ということだ。私にとってそうだったように、みなさんにとっても UPLB 研修が貴重な時間になることを確信している。ここまで読んでくださった皆様に感謝を込めて。Salamat -po !



UPLB 学生の Yael に漢字名を考えてプレゼント



B19&20 の男子 9 人全員で

完璧ではなくても

農学部応用生命科学コース 2年 H.K.(KAHO)

大学生になつたら一度は留学してみたい—入学当初から、そんな思いは頭のどこかにあつた。しかし部活動に所属している私にとって、スケジュール的に難しいのではないかと、英語も得意ではない自分で行ける留学はないのではないかと考え、次第にその思いに蓋をするようになって。「自分で海外旅行に行けばいい」と言い聞かせるうちに、気づけば一年が過ぎていた。

周囲の友人が留学先で撮った写真を目にするたびに羨ましさを感じながらも、「自分とは違うから仕方ない」と、挑戦しない理由を探していた。しかし、ある出来事をきっかけに留学の話を進めていただき、「やっぱり行ってみたい」という気持ちに向き合うことにした。不安は消えなかった。「自分で行けるのか?」という思いを抱えたまま、それでも「とりあえずやってみよう」と決意し、この留学に参加することを決めた。

そして3週間を終えた今、心から思うことはただ一つ、「参加してよかった」ということである。

留学の意味は人それぞれ異なるが、私にとっては少し特別なものだった。部活動を休ませてもらう以上、その分の準備をしなければならぬという責任を感じていた。しかし正直なところ、事前学習や渡航前の準備が完璧だったとは言えない。不十分な自分に嫌気が差しながらも、「それでも行きたい」という気持ちを優先した。

さらに、話の流れで学生リーダーを務めることになった。しかし直前の事前学習には部活動の合宿が重なり、参加できなかった。不安はどんどん大きくなるまま、3週間が始まった。

慣れない環境、異なる文化、初対面の仲間たち、少ない同期、苦手意識の消えない英語での授業と生活。さらに部活動を休ませていただいていた。しかし、それらがすべて気にならなくなるほど、この3週間は濃く、楽しく、充実した時間だった。毎日が一瞬で、気づいたら3週間が終わっていた。苦手なものから逃げない、その一心でできないことにも挑戦することを決めたこの時間は普通の生活では感じるできない、この場所でしかできない心躍る経験だらけだった。

ここからは、その一部を紹介していきたい。

まずは GI とよばれる現地の大学生が街を案内してくれる時間。会話はすべて英語で、うまく言いたいことがすぐに出てこなくても、つたない英語でつなぎながら思いを伝えようとする、優しくその意味をくみ取ってくれた。それだけではない。街の空気、店の雰囲気、歩いている風景、そのひとつひとつがすべて新鮮だった。この GI の時間は毎日の授業後に設けられているため、1日のごほうび的なものでもあつた。最も楽しみな時間であり、今日も GI があるから早起きも授業もがんばろうと思うことができた。さまざまなお店で、いろんなものを食べたり、フィリピンならではの交通手段や文化に触れたりすることは楽しい経験であったが、なにより印象深いのは、案内してくれる現地の大学生であるファンリテーターたちとの会話である。みんな元気がたくさん盛り上げてくれて、つたない英語も一生懸命聞いてくれるので、英語を話すことへの抵抗感もなくなる。またみんなでのピクニックを計画してくれたら、いつも和かけを惜しんで、最後の最後まで見送ってくれたりした。わたしは自分の英語への苦手意識を忘れてしまうほど、毎日の時間があつという間に感じていた。

つぎは Night Session の時間である。Night Session というのは夕食後に設けられている1日の復習や授業でわからなかったことを明確にする時間だ。この Night Session でわたしたちのサポートしてくれる Student Gardens という3人の現地の学生がいた。彼らはまだ宿題がない前半の授業では、発音や英語を使ったゲームを一緒にしてくれた。短い時間の中でどうすれば学んだものが定着するか、発音を授業でならったけどなかなか上達しない。そんな中でもできるようなまで付き合ってくれたら、楽しく覚えやすいようにポイントを教えてくれた。後半になってプレゼンや、原稿を書くようになってからは、1文1文の確認や英語でのうまい言い回しについて一生懸命教えてくれた。

ほかにも休日のちょっとした旅や、地元のマーケットにつれていってくれたり、フィリピンの伝統のショーを見た、アクティビティやカラオケ大会もした。毎日のごはんは向こうの人が日本人の私たちの食について考えてくれたら、たくさんのおいしいフィリピン料理を毎日3食用意してくれた。フルーツをもっていくと切ってくれたり、食べたてをお願いするとカップラーメンなども作ってくれたりもした。一緒にいった神戸の学生たちと同じホテルで毎晩たくさんお話ししたり、日本人だけであつとお出かしてみ

たり、たくさんの思い出ができた。たった3週間とは思えないほどの濃い大好きな時間になった。すべての活動において安心安全に楽しめるようにたくさんの計画をしてくれた現地の先生方や現地の学生のみんな。この留学だからこそ、たくさんの文化を知ることができたし、貴重な経験もたくさんできた。自分で行くだけではきっとできなかった体験だらけだと感じている。たくさんのひとに支えられて成長することができた。

この留学で学んだことは「すべての準備が完璧ではなくても、まず一歩踏み出すこと」自分には向いていないのではと思うことや、やっぱりとあきらめてしまうのをやめ、挑戦してみること、新たな気づきや考え方の変化を時間できる。今回の留学では英語学習以上の学びを得ることができた。

3週間は今思うとまるで夢のような時間だったが、その一つ一つは確かに意味を持つ経験であり、「もっとあれをしたい」「これにも挑戦してみたい」ということへのハードルは、以前よりも大きく下がったように感じる。

また日本に帰国した今でも連絡を取り続けてくれるファシリテーターや、深く中を深めることができた一緒に留学に参加した神戸の学生たちとの出会いは、かけがえのないものである。もしこの留学に参加していなければ、この出会いはなかったのだと思うと、恐ろしく感じる。

あらためて、この留学に参加してよかったと心から思う。この機会をくださった先生、この留学を成功させるために関わってくれたすべての方に心より感謝を申し上げる。

ささやかな一歩が、私をフィリピンへ連れていった

農学部食料環境経済学コース 2年 A.M(MAIKO)

雲一つない空、蒸し暑い空気とクラクションの音に包まれながら、私の3週間のフィリピン生活は始まりを迎えました。日本の3月とは全く違う暑さ、混沌とした渋滞道路、そして30人の仲間たち。マニラの空港に降り立った時、私は確かに高揚感を抱いていました。そのすべてはほんの少しの好奇心から始まりました。

そもそも、私がこのプログラムに応募したのは去年行った友達に「絶対行ったほうがいい」と勧められたらという何の裏付けもない理由です。別に、フィリピンの文化を学びたいとか外国の人と積極的コミュニケーションを取りたいからというように明確な目的があったわけではありません。ただ、英語での留学に少し興味があるというそれだけの気持ちでした。結果として、その少しの好奇心が私の春休み、そしてこれまでの価値観を大きく変えることになりました。

これから特に印象に残っている授業、GI、Free day、tripについて順をおって書き残したいと思います。

まず印象的だったのは授業です。これがフィリピンにきて一番初めのカルチャーショックでした。日本で授業といえば、教室で先生の話静静地に聞いてノートをとるというイメージが一般的だと思います。それに対し、フィリピンの授業は、とにかくアクティブでした。授業の始めにダンスをしたり、グループで寸劇をみんなの前で披露したり、ジーンガをしながら発音を学ぶなど考えられないほど自由な授業です。授業はコミュニケーションと発音の授業があり、午前3時間、昼休憩1時間を挟んで午後も3時間というスケジュールでした。日本の大学では90分でも長いと感じるのに「3時間?絶対無理だ」と最初は不安に感じていました。ただ始めてみるとアクティブな授業が多く自分も参加しているという感覚が強かったため時間は驚くほど早く過ぎ、気づけば授業が終わる日々でした。私が授業を通し特に成長できたと思う部分は発音です。フィリピンに行く前「r」と「l」の違いや「b」と「v」などの違いがほとんど分からず、始まってすぐは話しても相手に上手く伝わらないことが多くありました。しかし、授業や夜に行われる授業の振り返りなどで発音をたくさん練習することでこの違いを理解でき、少しずつ聞き返されることも減ったように思います。また、自分の好きなものをプレゼンする機会もありました。英語でのプレゼンは日本のプレゼンとは違い、内容だけでなくジェスチャーや表情を使うことも評価されるためかなり苦戦しました。ただ自分なりに工夫して英語でプレゼンする機会はとても貴重だったと考えています。

次にGIです。GIというのは平日授業が終わった後に行われる活動で、フィリピンの学生2人とグループを組み、2時間学外に出て実際の生活の中で英語を使うことができます。授業で学んだ英語をすぐに実践できる貴重な機会であり毎回のGIをも楽しみにしていました。GIの活動内容は様々で、みんなでカラオケにいったり、カードゲームをしたり、カフェに行つてゆっくり喋ったりといういろいろなことができます。現地の学生たちは皆明るくてフレンドリーで何を話しても笑顔で聞いてくれました。このおかげで、英語でしゃべることへの抵抗もすくなくなくなり、間違いを恐れずに話そうという気持ちをもつことができました。中でも特に一番印象に残っているのはグループのみんなでプリクラを撮ったことです。プリクラといっても日本のものとは違いフォトスペースみたいなところで時間が皆でワイワイと過ごすことができました。カチューシャを着たりしてポーズを取りながら撮影した時間はとても楽し、今でもその写真を見るときに記憶がよみがえってきます。

授業は楽しいですがやはりいつもより集中しているせいか疲れも溜まってきます。そんな中で楽しんでいたのが週末にあるFree dayです。Free dayとはその名の通り1日を完全に自由に過ごすことができます。部屋でまったり過ごしたり、友達とカフェに行ったりと過ごし方は人によって様々です。私は学校内にあるプールに入って飛び込み台から飛び込みたり、外に出て新しいフィリピン料理のお店を開拓してみたり、気になっていたスイーツを食べてみたりと充実した2日間を過ごすことが出来ました。また、土曜日の朝にはズンパというものも行われており、6時半から音楽にあわせて体を動かすこの活動には現地の人も多く参加していました。レストランの店員さんや、公園で犬を散歩している人などの学校以外の現地の人も交流でき、英語が聞き取れて理解でき自分の成長を実感した機会にもなりました。

さらに、普段許可されている場所以外にも行くことができる Trip もこのプログラムの大きな魅力の一つです。今回は UPLB トリップとマニラトリップ、Villa Escudero トリップの3つに参加しました。全て1日中かけて行われフィリピンについて深く知る機会になりました。UPLBトリップでは大学構内にある施設をまわるのですが、日本の大学とは比べ物にならないほど広く、IRRI というイネの研究施設、カラバオという水牛の飼育施設、300haもある植物園すべてをその敷地に有しています。イネの研究所では世界中の稲が冷蔵庫に保管されており、その冷蔵庫に入ることができました。-10度ほどの広い保管庫のなかに整然と並べられた大量の種子は圧巻でした。Villa Escudero ではキリスト教について知ることのできる博物館を見て回ったり、カラバオが引く車にのって音楽を聴きながらゆっくりしたりと日本ではできない体験をすることができました。また、施設内にはプールもありフィリピンではお風呂に入る習慣がないのでここで温かいジャグジーには入れたときはうれしく疲れが癒されました。マニラトリップでは教会のきれいな印象が印象に残っています。日本ではなかなか見られないほど大きな教会でステンドグラスから太陽の光が差し込んで光景はとても幻想的でした。また、戦争に関する施設やフィリピンの動物や植物の博物館を訪れ単に観光するだけでなくフィリピンの風土や歴史を学ぶことができました。

このように、充実した時間を過ごしていましたが、あつというまにこのプログラムも終わりを迎えようとしていました。帰国する前日には最後のイベントである Closing Ceremony が行われます。Closing Ceremony ではグループで劇を発表したり、成績上位者が表彰されたりしました。そして最後に現地の学生が私たちのために歌を歌ってくれました。GIで担当してくれた2人が私のところまで迎えに来てくれた時に、今までの楽しかったことや話したことが急に頭のなかに広がって、これで最後なのかと別れを実感し思わず涙がこぼれるほどでした。最初はうまく話せなかった英語も最後には言語の壁を越えてもつながらることができたと寂しさと同時に嬉しさも実感できました。

あれから約2週間経ってこの体験記を書いているわけですが、この短いようで長かったような3週間は確実に私の一生の記憶に残り続けるかと確信しています。またフィリピンでの生活を通していつもの大切なものに気づくことができました。

まず一つはいい意味で「完璧でなくても大丈夫」という考えです。フィリピンの授業では短い準備期間でプレゼンテーションや劇を行う機会が多くありました。最初はきちんと準備しないといけないという考えに捕らわれることもありましたが、「自分の一番伝えたいことが伝わればそれでいい」「くらの楽観的な感じで挑むことができ、臨機応変に対応する力が身に付いたと感じています。

次に積極性の大事さに気づきました。ただ周りが英語の環境に身を置くだけで自然に英語が話せるようになるわけではなく、自分から話しかけるなど積極的に行動することが何より重要だと実感しました。また、これまでの長期休みを振り返るとアルバイトをしてなんとなくの時間を過ごすことも多かったのですがこの留学にきて本当に良かったと感じました。最初は友達に誘われたからという消極的な理由で参加しましたが、今では「どんな理由であつてもとにかく一歩を踏み出してみることが大事だ」と強く思うようになりました。

この留学で私は数えきれないほどの多くの経験を手に入れることができました。だからこそ、この経験はなにか強い目標がなくても「なにか変えたい」と少しでも考えている人こそおすすすめしたいと思います。これまでの長期休みを何もせず終わったと少し後悔したことある人ならこのような挑戦は大きな意味を持つはずです。「この休みに何をしたのか」と聞かれたときに胸をはって話せるような経験をかけがえのない仲間と一緒に作ってませんか。

アスファルト舗装をふやかして

農学部応用植物学コース 1年 (K)IO

人が苦手になる理由はいくつかあると思いますが、私の場合、それは自分の過剰防衛的な性格にあったのだと思います。圧迫されるような空気感の部屋の中で、5、6人くらいの相手と、ビジネスであれカジュアルであれ、会話をすると、何を話したいかわからなくなるのは、「自分から話し出すなんて差し出がましいかも」と時折思っからでした。そんな自分を守るために、「自分は独特の言語センスを持っているだけなんだ」と思い込ませようとしたこともありました。確かに自分の使う言葉に誇りは持たたいとは思いますが、コミュニケーションが苦手なのは結局変わりません。燃るような毎日過ごしていました。

そんな時にこのフィリピンでの3週間の研修の案内を受けて、強く興味を惹かれました。「フィリピン人はおしゃべりで、打ち解けやすい」という情報を見てごこだ、と思いました。この研修なら、たくさん人と深く話せる機会があつて、そこでコミュニケーション能力を磨けるはずだ！（そこに言語は関係ありません。）そう思って、大変悩みましたが最終的に参加を決めました。

研修が終わってから自分を振り返ってみると、自分はまだまだ昔もむさむさな小さな石ころみたいな存在だったんだなと思ひ知らされました。さあ、どうしようか？

フィリピンに来て—ここはぜひとも、自分の身体で感じてほしいのですが、私がまず第一に感じたのは、「明るい」ということでした。今思い返せば、この活気を浴びることができる、というだけでも来る価値が十分にあつたと感じています。これはフィリピンが熱帯にあるため物理的に明るく、という意味もありますが、それよりも訪れた街の陽気さ、活発さをならためるという言葉で形容しています。なぜこゝまで明るさを感じたのでしょうか？これは、自分の考えですが、フィリピン(人)はいい意味で自由で、臨機応変さを受け入れる土壌と素養が涵養されているのだと思います。詳しく語ることは初見の感動を損なってしまうため控えますが、中でもところどころ割れている道路の上で、車と人と野犬がミックスジュースのようにドロドロ、ソロソロと間を縫ってはうまく移動していき光景などは圧巻です。

フィリピン人の活発さ、行動力も、まず日本ではありえないと感じました。平日でも夜でもナイトマーケットやお祭りが開かれることがあつたし、何か集まりごとがあれば遠慮なく盛り上げます。日本では上下関係や集団内の自分の立ち位置などを気にすることもあり、集まりごと何かと考てて行動しなければならぬことも多かったので、老若男女問わず近い距離間で騒ぎ楽しむことのできる空間は新鮮でした。しかし、学生は勉強で謙虚な姿勢で学習に取り組んでいます。私は現地の学生との会話の中で、その教養と大人さ、そしてどこか達観した豊かな人生観に胸を打たれました。自分もこのように、深いものある学生でありたいと憧れました。

ここまで、フィリピンの様子、フィリピン人とのやりとりから学べたことをたくさん書かせてもらいました。しかし実は—ここからが、他の海外留学のプログラムと大きく異なるところだと考ていたのですが、同じく日本から飛び出してきた他の神戸大学生とも、多くのことを学ばせてもらったのです。

ここには、強い目的意識と自分を変えようという意志をもって留学に臨んできた仲間が29人います。私のら選択で、留学という金銭的にも、時間的にも、体力的にも負担のある道を選んだ人たちが、私は彼らとの3週間のやり取りの中で、幸いなことに、自分のちっぽけさに気づくことができました。フィリピンの人々のあたたかな雰囲気と、現地の方の痛み入るほどの親切さに加えて、何気なく、普通のことのように声をかけ自分を知らうと努力してくれる仲間がいることのがたさに気づけたことは、これまでの人生の中で、何事にも代えがたい経験の一つでした。日本に戻ってからは、私は自分が割れた道路の石ころみたいにちっぽけだったということを感じました。自分を守るばかりだった自分を変えなければならぬと感じました。同時に、日本ではかなり多くの人が厚い心の壁を設けているということを実感しました。私は—当然、日本人のみんながそうだということもありませんが、多くの人が実際は、相手に理解されたいし、相手も理解したいと思つているはずだと、確信しています。したがって私はフィリピンで得たコミュニケーションというやり方を実践して、ここ日本でも、できる限り多くの人を理解していきたいと思つています。それは、一見するとすぐきれいに舗装されている道路のアスファルトを、少しずつふやかしていくようなものなかもしれません。アスファルトは水ではふやかせないし、大変ではあるけれど、粘り強くその舗装をふやかす方法を考て実践してみれば、フィリピンの道路みたいにところどころ割れた、素直で自然な性質を知り、理解できるかもしれません。それは人間関係において、一番いいことなのではないかと、私は考えています。



3.4階が総長室の図書館前のペガウ像(ペガサス+フィリピン固有の水牛タマラウ)と